発行所：公益財団法人 北野生涯教育振興会
ＵＲＬ：http://www.kitanozaidan.or.jp/

生涯教育だより

2018
春
季刊 No.116

評議員会および研究助成金授与式、論文入賞者表彰式 …… 2

プロフィール・インタビュー
放送大学長　來生 新さん …… 12

いつでも　どこでも　だれでも学べる
公益財団法人 北野生涯教育振興会
KITANO FOUNDATION OF LIFELONG INTEGRATED EDUCATION

評議員会および研究助成金授与式、論文入賞者表彰式

人生100年時代の学びを支援

2017年11月10日、ホテルオークラ東京にて評議員会および研究助成金授与式、論文入賞者表彰式が行われた。評議員会では、第44期決算および第45期予算が報告され、すべて承認された。

その後、会場を移し、例年通り研究助成金授与式、論文入賞者表彰式が行われた。冒頭、財団を代表して市橋淳平常務理事が以下のようにあいさつした。「当財団は1975年の設立以来、学びを志す人々に場を提供してまいりました。2010年12月には公益財団法人の認定を受け、今年で8期目に入り、より公益性を高めた事業を行っております。1976年から実施している研究助成金は、今年で延べ102名となりました。

また1977年から実施している懸賞論文の応募者数は、延べ11、771名となりました。まさに継続は力なりを実践している事業です。今年の論文テーマは「変化に挑む」でしたが、課題が検討された時期は、熊本の地震、選挙権の18歳への引き下げ、英国の国民投票によるEU離脱など、外的にさまざまな変化がありました。一方で個人としても人生の節目やアクシデントなどの変化があるはずと課題を設定したところ、473編もの作品が集まりました。

あいさつする市橋淳平常務理事

昨年、リンダ・グラットン著『LIFE SHIFT 100年時代の人生戦略』が話題となりましたが、ここに書かれている人生100年の時代も、変化に挑むの一例ではないでしょうか。長い人生での学びの話は、生涯教育のコンセプトに近いと思いました。働くための学びや人生を豊かにするための学びなど、何を生涯教育とするかは人それぞれですが、その手助けを財団として担っていきたいと考えております」。

続いて、生涯教育に関連する調査、研究を支援するための研究助成金の授与式が行われた。今回は7名に給付し、海外出張中の1名を除く6名が出席し、一人ひとり研究題目と概要を発表した。

「心理学と神経科学を統合した『むずかしさ』の検討」

綾部 宏明さん
（京都大学大学院 教育学研究科 大学院生）

学習者が最もつまずきやすい数学は、図表を使った視覚的な理解が良いということが分かってきているため、脳波を測定し分析することで、図表の活用方法を明らかにしたいと考えています。

「博物館と連携した遠隔教育による新たな生涯学習システム」

稲村 哲也さん
（放送大学 教授）

野外民族博物館の設立に携わった関係もあり、スクーリングで博物館に足を運び、学んでもらうことができないかと考えています。生涯教育と博物館の連携モデル構築に取り組みます。

「日本人看護師の異文化看護プログラムの開発に関する研究」

入山 茂美さん
（名古屋大学大学院 医科系研究科 教授）

グローバル社会では、異文化看護、ケアの提供が重要課題になっています。実態を把握・分析し、異文化理解の知識を備えるための看護教育プログラムを開発する予定です。

「夜間理学部における生涯教育の事例研究 ～先端ナノバイオ研究を通じて」

梅村 和夫さん
（東京理科大学 教授）

夜間学部には、定年後の方、企業の経営者などさまざまな学生が在籍し、まさに生涯教育の場になっています。夜間学部が減少する中、新しい可能性を模索した

いと考えています。

「臨床現場の医療職に対する実践的なEvidence - Based Medicine 生涯研修の実践とその評価」

清水 忠さん
（兵庫医療大学 薬学部 創薬化学研究室 講師）

超高齢化社会では職種を越えた連携による地域包括ケアが必要です。現場の医療職に向けた生涯教育を始め、教育効果があり、新しい処方提案に向かっている成果を集めています。

「学校と地域の連携における活動システムの調査研究」

西村 彩恵さん
（姫路大学 教育学部 非常勤講師）

学校と地域の連携を推進するために、学校内で教員の意向を聞いて地域とつなぐ地域連携教員の取り組みを調査し、強固な関係を作るより良いシステムについて研究を進めています。

最後に、第39回懸賞論文入賞者の表彰式が行われた。今回のテーマは「変化に挑む」で、全国から473編が集まり、19編が入選した。表彰式に出席した入賞者9名に、市橋常務理事から表彰状と賞金が授与された。

入賞者インタビュー

論文入賞者の皆さん
前列左から渋谷江津子さん、高橋幸子さん、市橋常務理事、小笠原論文審査委員長、相野正さん、小暮愛子さんと盲導犬コニー
後列左から田嶋達也さん、星野有加里さん、平賀千春さん、菱川町子さん、藤原伸治さん

第1席「共鳴」

高橋 幸子さん
（福島県・和楽器講師）

日本の伝統芸能の魅力は、いくつもの要素を取り除いていき、残ったものだけを表現することです。邦楽の愛好者は年々減少していますが「消えていく物は本当にいらないのか」という考えを抱いて、これからも学び続けたいと思います。

第2席「自分に与えられた運と自分が求めたチャレンジ」

相野 正さん
（大阪府・無職）

18歳から続いた祖母との生活から、ハンディを越える努力の大切さに気付きました。さまざまな苦労がありましたが、今私が前を向いて歩く原動力になっています。祖母と私との3人の生活を支えてくれた妻にも感謝しています。

第2席「心眼」

小暮 愛子さん
（群馬県・ライフコーチ）

失明するまでの過程を一度整理してみたいと考え、応募しました。振り返ってみると、今まで母に感謝の言葉をちゃんと伝えていなかったので、今回の受賞を感謝の気持ちとして贈りたいと思います。これからも物事の真実の姿を見抜く「心眼」を鍛えていきます。

第2席「守りから攻めへ」

渋谷 江津子さん
（青森県・美容師）

6児の母となった娘を心配することもありました。それでも、子育てや夫の借金返済などのさまざまな困難を乗り越えて「為せば成る」という単純明快な人生哲学を体現する娘を見て、「親を超えたな」と感じました。今回の受賞は娘夫婦のおかげだと思っています。

第3席「けん玉で異文化交流」

田嶋 達也さん
（千葉県・会社員）

（けん玉を通じた異文化交流を実践する田嶋さんには、けん玉によるパフォーマンスを披露していただきました）

第3席「角度を変えて考えてみる」

菱川 町子さん
（愛知県・無職）

生活が大きく変化した時、その変化をどう受け止めるかがその後の生き方を決めていくと思います。私も夫を亡くした時は呆然としましたが、主治医の先生の「死ぬのは悪いことではない」という一言に救われました。今はモンゴルで変化に満ちた生活を送っています。

第3席「表裏一体」

平賀 千晴さん
（千葉県・学生）

病気を告げられた時は、「授業の単位が取れるかな」という心配がまず浮かびました。今はたまに定期検診に行けばよいくらいまで回復しています。難病による体の変化から得た相手を思いやる気持ちを大切に、コピーライターになるという夢に向けて進んでいきたいです。

第3席「パーキンソンを友にして挑戦」

藤原 伸治さん
（神奈川県・無職）

（パーキンソン病の発症を機に民謡ボランティアを志すようになった藤原さんは、ご自身が製作に携わった民謡を会場で歌い上げました）

第3席「咲き誇れ、南の花よ」

星野 有加里さん
（宮崎県・高校教師）

表彰式当日の朝、よく空の写真を撮る父に「どうして空ばかり撮るの」と聞くと、「同じ空はないからね」という返事がありました。まさに今回のテーマのように、空は変化の連続で、その変化を大事にしていくことが大切なのだと思います。

表彰式後の懇親会では、恒例となっている音楽奨学生の演奏が披露され、和やかな雰囲気の中で交流を深めた。

演奏を披露する
音楽奨学生の牧野葵さん（上）
と萩賢輔さん（下）

講評

生きることは、変化に挑むこと

明治大学名誉教授
小笠原 英司

挑戦を厭わない真面目な日本人

受賞者の皆さんおめでとうございます。今回に限ったことではありませんが、応募作品を通して、皆さんの人格や人間性に触れ大変感動しました。審査ではどの作品も甲乙つけがたく、選定に苦労しました。文章力にそれぞれ個性があり、経験に基づいたエッセイの内容もそれぞれに味がありまして、私どものような経験の浅い、若い審査員には太刀打ちできないものもあります（笑）。しかし非常に楽しみながら、審査させていただきました。

今回のテーマは、「変化に挑む―見えてくる新しい世界」で、近年では最多の作品数となる473編の応募作が集まりました。おそらく、挑戦することが好きな日本人好みのテーマだったのかもしれません。これは私見ですが、日本人の多くは楽天的で、前向きなところがあるのではないでしょうか。戦後、国土が焦土と化しても、大きな地震や津波に襲われても、くじけない姿勢があります。済んだことは水に流し、いつまでもくよくよしていても仕方がないとあきらめ、前を向いて頑張ろうとするのが日本人の国民性なのではないかと思っています。日本人は勤勉で真面目で手抜きをせず、日々こつこつと努力を重ね、それ自体に価値を見出しています。ですから、日常のさまざまな変化に挑むことは、日本人にとっては当たり前のことなのかもしれません。そういった点で今回は、自分の経験に照らし合わせて書きやすいテーマだったのではないかと思います。

挑戦とは、自己変革

そもそも「変化」とはどのようなものでしょうか。自分たちを取り巻く環境の変化と、それに対応する挑戦という意味での変化があります。後者においては、それぞれの立場や認識において変化を捉えるという意味で主観的なもので、変化への挑戦は自分への挑戦、自己変革を意味しているのだと思います。私たちの人生は、年齢を重ねるごとに、多様な形で変化が頻繁に起こります。日常的

には小さな変化があり、ときどき中程度の変化が起こり、そしてたまに大きな変化が起きます。「生きる」ことはまさに、変化に挑むことです。

次に「挑む」の意味ですが、審査員に言語学の権威である森山先生がいらっしゃるのでお聞きしてもよかったのですが、自分で『広辞苑』をひいてみました。私たちが「挑む」の意味として想定していたのは、困難を乗り越えるということでしたが、『広辞苑』に掲載されている第一の意味は「張り合う、競い合う」で、第二の意味は「恋慕をしかける、言い寄る」です。この異性に挑むというテーマで書いた人はいませんでしたね。第三の意味が「戦いを仕掛ける、困難に立ち向かう、それを乗り越える」という意味ですが、やはりこの意味で捉えた内容で書いた人が多かったようです。

応募作は「挑む」ほうの内容については、よく書かれていましたが、さらに欲を言えば、どのような種類の変化があり、それが自分の生活のどの部分を変えたのか、その変化からどのような課題が生じて来たのか、というところまでもう少し書き加えていただければもっと良い内容になったのではないかと感じています。

いくつになっても挑戦は終わらない

私はいつも、若い人にももっと懸賞論文に応募してほしいという希望を持っていますが、応募者の多くは時間に余裕ができた年代の方、特に学校の先生を経験された方が多いですね。そんな中、今回の応募作に、東日本大震災の被災地で感じたことを綴った高校生の作品がありました。お若いのになかなかしっかりしていると思ったのは、支援する側・される側という関係ではなく、相互の交流を目指すべきだという意見です。被災地の皆さんと自分たちがどのような交流をなすべきかという観点で、課題を捉えた内容でした。そのほか、筋ジストロフィーを発症した30代の女性会社員の方が東日本大震災に遭遇し、夫と2人で新居探しに苦労し、福祉の仕事に挑戦し、会社勤めのかたわらでさまざまな資格に挑戦したという経験を綴った作品もありました。これも圧倒的に大きな挑戦だと思いました。

私事ですが70歳になり、昨年3月に43年間の大学教員生活に終止符を打ち、明治大学を退職しました。これは私の人生における大きな変化です。退職は、さぞかし生活に大きな変化を引き起こすだろうと思っていたのですが、蓋をあけてみたら以前とあまり変わりません。もともと大学の教員は定時に家を出るような生活ではなかったので、朝に雑事を片付けてから書斎で仕事をするという生活にあまり変化はありませんでした。以前、受賞者の男性に歌手になりたい方と役者になりたい方がいらっしゃったので、私も退職したら役者を目指そうかなと冗談で言ったのですが、実際はまだ何も新しいことには挑戦していません。これから退職される審査員の先生方に言いたいのは、退職してたっぷり時間があるから、たくさん原稿が書けるなんて思っていたら、大間違いです。多忙で締切に追われている状態のほうが生産性は高いことが分かりました。時間に余裕があるといつでもできるという感覚があって筆が進みません。

まだ定年退職後の生活は始まったばかりですので、様子をみながら、受賞者の皆さんに負けないよう、挑戦すべきものをみつけて頑張りたいと思っています。

〈私の生涯教育実践シリーズ '17〉

『変化に挑む
—見えてくる新しい世界』

1,000円
ぎょうせい刊

ご希望の方は財団事務局までどうぞ。

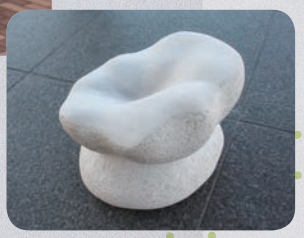
第33回 彫刻奨学生作品展

2017年12月5日～16日まで、日本大学芸術学部江古田キャンパス内で「第33回 彫刻奨学生作品展」が開催されました。
奨学生5名の作品がギャラリーや資料館、中庭に展示され、多くの方々に鑑賞されました。奨学生の作品は３月に山梨県笛吹市「藤垈の滝大窪いやしの杜公園」内に設置されます。

日本大学大学院
柴田 直起さん
『自刻像』

鉄というと“板”というイメージがありますが、それをなくしたくて塊の作品を造ってみました。これまでやったことのない“人体”をやってみたいと思い、鏡に映したり、触ったりして造りました。

女子美術大学大学院
巾崎 知佳さん
『すべてが融け合いそこにある』



水やエネルギーというような定型のないもののイメージを追い求めて作品にしていくことに魅力を感じています。この作品は自分の体の中にあるエネルギーを表現してみました。

日本大学大学院
川口 透さん
『collage ―視線―』

これは彫刻ではなく、ファッション雑誌から目（カメラ目線）だけを集めて作ったコラージュです。自分がどう見られているのか、どう思われるのかという、人の“視線”を表現した作品です。

日本大学
近藤 貴章さん
『紙飛行機』

これまでは既製品を自分のフィルターを通して作品を造っていましたがもっと軽くてふわふわしたものを造りたいと思い、紙飛行機を作品にしました。重さを感じさせない黒皮鉄独特の銀色が魅力です。

多摩美術大学大学院
福井 敬貴さん
『彼らのためのモニュメント』

幼いころから昆虫に興味があり、卵から幼虫、蛹そして成虫へと形を変えていく“変態”というプロセスと、鋳造のプロセスを重ね合わせて黄金虫の作品を造りました。

2017年
外国人奨学生奨学金授与式

1999年、経済的には恵まれていないけれども成績優秀な学生に学習の機会を与え、日本との友好関係を築くために貢献できれば、と考えて外国人奨学金制度が発足しました。中国の天津にある南開大学から始まった外国人奨学金は、現在では中国の広州、ベトナムのハノイ、インドネシアのソロ、フィリピンのミンダナオで展開しています。

2017年9月5日に、ベトナムハノイのズンサ高校入学式において奨学金授与式が行われ25名の奨学生に奨学金を手渡しました。また9月15日には、奨学生によって地域の優良企業であるベトナムスタンレーの工場見学が実施されました。9月21日には、ハノイの財務経営管理大学で奨学金授与式が行われ、学長挨拶のあと、歌やダンスが披露されたのち北野財団の市橋常務理事より奨学金を20名に授与しました。10月12日には、国立農業大学の入学式において奨学金授与式が行われ、15名に授与しました。

インドネシアでは、10月4日にソロにあるPOLINES大学にてインドネシアスタンレーの若林社長より祝辞をいただいたあと、20名の奨学生に奨学金を授与しました。また、同社スワント取締役よりモラルに関する講話を行っていただきました。

ベトナム

ズンサ高校

奨学生と関係者のみなさん

ベトナムスタンレーの工場見学

財務・経営管理大学

奨学生と関係者のみなさん

市橋常務理事より奨学金授与

国立農業大学

南国の花々で美しく飾られた授与式会場

華やかな入学式アトラクション

※ベトナムでは高校、大学とも入学式には歌や踊りなどのアトラクションが行われます。

インドネシア

POLINES大学

奨学生と関係者のみなさん

Beasiswa Tumbuhkan Semangat Kompetisi

奨学金授与の様子が大きく掲載された現地新聞

洋上研修

「生産性の船」体験レポート

[2017年11月8日㈬～16日㈭　9日間]

北野財団では、公益財団法人 日本生産性本部が主催する洋上研修『生産性の船※』に、勤労者を派遣し、その派遣費用を助成しています。参加者が洋上という特殊空間に身を置き、異業種間交流を通じて人生のあり方を見直す機会を得ることで、生涯にわたりこの経験が活かされることを願っています。今回は参加した7名のレポートをご紹介します。

※『生産性の船』とは
「行動変革への挑戦」をメインテーマに、大型船という非日常的な空間、人間関係の中に身を置き、初対面の異業種・異職種の人たちとグループを作って行動する研修。今回は「顧客本位の考え方とその実践」について学び討議を重ねた。テーマに沿って具体的な行動計画を作成する研修、現地企業に学ぶ研修、海外での経験交流という3つのプログラムからなっている。

ツインタワー
（シンガポール）

マーライオン
（シンガポール）

顧客目線で業務を進める大切さを実感

今回の研修に参加し、異業種の人達と交流する中で感じたことは、業種は異なるが抱えている問題は似た問題が多く、特に「顧客の目線で物事を考えられていない」という問題は、どこの会社にも程度の差はあるが抱えているということがわかった。又、様々な問題に対して自分自身はどのように対応していたかを振り返るきっかけとなった。研修では通常の生活では接することの少ないと思われる業種の人達と会話をすることができ、良い経験ができたと思う。改めて「顧客目線」で業務を進めることについての大切さを感じることができた。

中村 健太郎さん

様々な意見をまとめるのに悪戦苦闘

新たな気づきと人脈を得ました

「人の考えは人それぞれ」だということが、研修を通して再認識できた。組織においては、様々な人材をフルに活用し、成果につなげていかなければならないことを意識できた。管理者コースの方々と議論を交わす中で、異なる視点でチームというものを捉えられたのは良い経験だった。これまで以上に発信型人間として他者に影響を与え巻き込んでいきたいと思う。それが良い環境を作り、ひいては成果が出る職場へつながればと思う。新たに気づきも人脈も得ることができた。今後の自らの成長につなげていきたい。

船長主催パーティー

鈴木 俊祐さん

大変な役回りでも進んで引き受ける姿勢が大切

今回の研修では、様々な業種の方々と交流を持つことができ、いろいろな経験や考え方を学ぶことができた。自分と同じチームリーダーの立場にある方々と、職場での悩みや困り事について共有し、十分な時間をかけ会話することができ解決のヒントを得ることができた。また、研修中に印象に残ったことは、大変な役回りを進んで引き受けるメンバーに対しては、協力したい、助けたいという気持ちに繋がることがわかり、自分も職場で部下、同僚、上司にそのような姿を見せられるように行動していきたい。

マレーシアのペナン島へ上陸し
現地文化交流

野口 玲さん

多くの学びと出会いがありました

満足できる資料が完成

百足 祐子さん

今回の研修では沢山の方々との出会いがあり、彼らから、多くの事を学び、気づきを得られた。共通点が皆無だった初日から、日々のチーム討議の中でどうにか意見をまとめてゆき、最後にチームメンバー全員が満足できる発表へと仕上がったことには感動した。オリエンテーリングの時間では、また異なる参加メンバーとチームでの活動があり短い時間であっても自分から相手の良いところを見つけようとする姿勢でお互いが接し合えば、とても良いチームが築け、共有できることを感じた。本当に多くの学びや出会いを得ることが出来た。

何事も前向きに考えます

尾澤 和博さん

お互いがどのような人なのか、またどのような考え方なのか、良く知らないと信頼関係が良くならない事を改めて気付かされた。自分1人では決まった方向からの見方、考え方になってしまう可能性があるが、チーム討議を進めていくといろいろな意見、考え方があり、自分1人の考えよりも、より目標に向かって良い案が見つかる事も多くあり、他者の意見を良く聞く必要があると実感した。何事も後ろ向きに考えないで前向きに考えて行けるよう心がけたい。

意見を出し合ったグループ討議

井川 直人さん

メンバーへの指示の伝え方が変わりました

最高のメンバーとの出会い

他社、異業種、年代も別の大人が集まると、自分の視野と異なる景色がたくさん見えてくる。どの景色も間違いではないが、凝り固まった固定概念をほぐす良い機会となった。相手を思いやれる、尊重できる大人が集団となって活動をする際、明確な役割を定めてなくてもそれぞれが考え、どんな役割を担っていくかが自動的に形成されていく関係性を新鮮に感じた研修となった。個人の変革として、「あと30分しかない」「あと30分もある」同じ事実に対するリーダーとしてのメンバーへの伝え方に気付きを得られた。

積極的な発言・行動が大切

田村 勝さん

今回の研修では多くの事を学んだ。中でも仕事は一人で遂行するものではなく組織として役割があり、その歯車が効率よく噛み合って進展して行くものである事。その為には相手の話を聞き、理解したうえで良く協議し、方向性を決めていく必要がありその中心としてリーダーシップが必要である事。また、個人で何か行動する為には目的を定めてそれを達成する為にどうあるべきかを考え、行動することが必要であり、積極的に発言・行動することで、物事が進むという事を学んだ。今後は周囲の意識・行動も変え、会社の業績向上に貢献していきたい。

チームメンバーが一丸となった瞬間

モスク
（クアラルンプール）

ミンダナオ子ども図書館（MCL）に保育所寄贈

フィリピンでは、保育所をでないと小学校へ入学することができません。そのため「ミンダナオ子ども図書館（MCL）」では、保育所を建設し英語を教えるなどして、入学前の子どもたちを支援しています。北野財団では、子どもたちの就学率向上の一助としてMCLが保育所を建設する費用を助成しています。

雨季のため資材を運ぶことができず建設が遅れておりましたが、このたびマキララ地区※に北野財団寄贈の「Sitio Balawan保育所」が完成し、2017年11月25日に開所式が行われました。開所式では、セレモニーの後、MCLスタッフによる読み聞かせなどを行いました。この保育所を第一歩として子どもたちに明るい未来が開けることを願っております。現時点で財団が寄贈した保育所は11ヶ所になりました。

※マキララ地区は、MCLのあるコタバト州キダパワン市から国道を南に車で30分ほど走り、さらに舗装されていない道を30分走ったところにあります。森の中ではなく、周りにはバナナやゴムのプランテーションが広がっています。しかし治安が良い地区ではないため、夜間の通行は車であっても避けるような地区となっています。

建設中の保育所

北野財団より寄贈と書かれた看板

保育所外観

先生のお話を聞く子供たち

MCLとは

MCLはフィリピンミンダナオ島内の市町村で読み聞かせ活動、医療プロジェクト、スカラシップ、子どもシェルター、避難民救済活動、孤児施設運営などを行っているNPO法人。
（代表　松井 友氏）

財団ニュース

ご報告

目黒区より「図書寄贈」への感謝状受領

当財団が実施している小・中学校への図書寄贈に対して、1月17日、目黒区から感謝状を授与されました。当財団では2010年から毎年、目黒区内の全小・中学生の心の糧になるように、と図書を寄贈しており、今年は158冊を寄贈しました。

これまでに合計7，158冊を寄贈しています。

尾﨑富雄教育長（左）から感謝状を授与される市橋淳平常務理事

お知らせ

第40回 事実に基づく小論文・エッセー募集「私の平成」

まもなく「平成」という時代が終わろうとしています。

この30年あまり、世界では湾岸戦争が起こり、アメリカ同時多発テロ、イラク戦争、リーマンショックなど、予想もしていなかった出来事が次々に起こりました。日本に目を向けてみても、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、福知山線脱線事故、東日本大震災、熊本地震など、大きな災害や事件、事故が多かったと言えるでしょう。また、バブル崩壊、非正規雇用、貧困と格差、長時間労働による過労死、と様々な問題が起こり、暗い時代とも言われています。

しかし、そんな時代の中であっても、多くの事を学び、人との絆が生まれ、出会いや別れがあり、誰かに助けられ、思いやりに涙し、誰かと共に築いてきたものがあったのではないでしょうか。平成元年に生まれた子供は今や30歳。次の時代を担ってゆく若い世代の活躍には目覚ましいものがあります。

かつては夢物語だったことが現実となり、驚くほどのスピードで移り変わってゆく時代です。日本の歴史においても「改元」という大きな節目を迎えます。今この時に何を学び、何を残さなければならないのか、ご自身の経験から様々な「平成」を次の時代へ伝えてください。将来に向けて改めて絆を持つ大切さ、誰かから学んだこと、時代から学んだこと、次世代へ伝えたいことなどを小論文・エッセーに綴ってください。

応募規定 縦書き400字詰め原稿用紙8枚～10枚

締切 2018年5月7日(月)

賞金 1席（1編）賞状・副賞50万円
2席（3編）賞状・副賞10万円
3席（5編）賞状・副賞5万円
佳作（10編）賞状・副賞3万円

入賞発表 2018年8月初旬

表彰式 2018年11月9日(金)

会場 ホテルオークラ東京

ライフプランセミナー（その8）50代から考えるライフプラン

「100歳まで生きる」が当たり前の時代がやってくるかもしれません。専門講師の指導により、定年後も生きいきと暮らすためのライフプランを作成する講座です。お一人でもご夫婦でも参加可能です。健康で豊かな老後のために、是非ご参加ください。

日程 2018年6月23日(土)
9時30分～17時30分

会場 渋谷エクセルホテル東急

会費 1人 1，500円（昼食付）

歴史研修（その9）『蝦夷の城めぐり』

北海道は函館の大変珍しい星形をした「五稜郭」と桜が美しい「松前城」をめぐります。

日程 2018年5月16日(水)～17日(木)

講師 静岡大学名誉教授 小和田 哲男氏

定員 40名

五稜郭

伝承研修（その25）偉人のふるさとをたずねて「高知編」―幕末維新に活躍した先人たち

大政奉還から150年を迎えて、「志国 幕末維新博」が開催されている高知を訪れます。土佐が生んだ偉人、坂本龍馬の軌跡を辿り思いを馳せましょう。

日程 2018年7月8日(日)～9日(月)

定員 40名

奨学生募集 ―学習意欲のある社会人を応援―

奨学対象
・科目等履修生（学生を除く）
・放送大学大学院修士全科生および選科履修生（ただし30歳以上または実務経験5年以上）

申込者の中から書類選考のうえ奨学生を決定します。なお、奨学金は給付で返済不要です。

締切 2018年4月27日(金)

〈科目等履修奨学生〉
奨学金 年間20万円
定員 15名程度

〈放送大学大学院修士全科奨学生〉
奨学金 20万円（各年度10万円）
定員 10名程度

〈放送大学選科履修奨学生〉
奨学金 年間7万円
定員 15名程度

伝統文化「雅楽」に親しむ

伶楽舎による雅楽の解説を聞いて、管弦・舞楽を鑑賞します。楽器や舞の体験コーナーもあり盛り沢山な内容となっています。舞台芸術「雅楽」の世界をご堪能ください。

日程 2018年6月9日(土) 13時30分～15時30分

会場 めぐろパーシモンホール 小ホール

定員 180名

会費 500円

勇壮華麗な舞楽「陵王」

新任評議員ご紹介

財団活動の充実を図るため、ご協力いただくことになりました。

古屋 滋さん

表紙ギャラリー

当財団の使命は、一生学び続ける人を応援することです。学ぶ人が、今日よりも明日、一歩でもよくなろうと努力するには、目標が必要だと思います。そこで、世のため、人のために偉業を成し遂げた偉人を目標に掲げたいと考え、財団機関誌の表紙に登場いただくことにしました。

杉原 千畝（1900～1986）

「東洋のシンドラー」と呼ばれる杉原千畝は早稲田大学を中退後、外務省の官費留学生として満州のハルビンでロシア語を学びました。その後、外務省に採用されると満州、フィンランドなどの勤務を経て、「命のビザ」発給の地であるリトアニア・カナウスの日本領事館に領事代理として赴任したのは、第二次世界大戦が勃発する直前1939年のことでした。

1940年夏、ナチスによる迫害から逃れようと大勢のユダヤ系避難民が日本領事館に押し寄せますが、その大多数はビザの発給要件を満たしていない人たちでした。杉原は外務省に、人道上ビザの発給を認めるよう願い出ましたが認められることはありませんでした。悩んだ杉原は外務省の命令に背き、自らの判断で出国直前までビザの発給を続け、6000人以上の命を救ったと言われています。終戦後、1947年に帰国した杉原は、独断でビザを発給した責任を取らされ外務省を退官しました。

杉原は自ら「命のビザ」発給のことを語ることはありませんでしたが1969年、その人道的な功績が称えられイスラエル政府から勲章を授けられました。更に1985年には「諸国民の中の正義の人賞」を授与され、エルサレムの丘に顕彰碑が建てられました。また1991年にはリトアニアの首都の通りの一つに「スギハラ通り」と名前が付けられました。外務省は1990年代に入ってから関係修復に努め、2000年にその偉業を称え日本国政府による公式な名誉回復がなされました。

写真提供：NPO杉原千畝 命のビザ

設立のねらい

当財団は、スタンレー電気株式会社の創業者北野隆春の私財提供により、生涯教育の振興をはかる目的で1975年6月23日、文部省（現文部科学省）の認可を得て発足し、2010年12月1日に公益財団法人となりました。当財団は、いつでもどこでもだれでも学べる機会をつくり、学ぼうとする方々に対し、より豊かな生きがいを持てるよう、時代が求める諸事業を展開してまいります。

生涯教育だより 第116号

2018年3月10日発行
編集人　市橋　淳平
発行人　北野　重子
発行所　公益財団法人　北野生涯教育振興会
〒153-0053　東京都目黒区五本木1丁目12番16号
電話　東京　03（3711）1111

こ●ち●ら●編集室

今号が発刊される頃には、韓国・平昌での第23回冬季オリンピックが、日本中を熱い感動と興奮につつみ込んで閉幕していることでしょう。今大会での日本人選手の活躍はめざましく、怪我からの復活、悲願の金メダルなど素晴らしい大会となりました。

冬季オリンピックでの感動といえば、1998年に開催された長野オリンピックでのスキージャンプ団体を思い出す方も多いのではないでしょうか。悪天候の中での失敗ジャンプ、続く起死回生の大ジャンプ。そして最終ジャンパーを祈るようにじっと見つめるメンバーと大観衆。その大きなプレッシャーの中で華麗な大ジャンプを魅せた最終ジャンパー。駆け寄るメンバーと大歓声。何度観ても涙してしまいます。

天候という運に翻弄されながらも、自らの力を信じ、切磋琢磨してきた仲間の力を信じ、それぞれが積み重ねてきた日々の弛まぬ努力が実を結んだ瞬間でした。

アスリートたちは成りたい自分を思い描いて日々努力を続けています。これは生涯教育にも通じるものがあります。生涯教育に終わりはありません。努力し学び続けることで、自分が目標とする人生を歩めるのではないかと思います。そのお手伝いをこれからも北野財団は続けて参ります。

放送大学長
來生 新さん
SHIN KISUGI

知らない世界を知ることが生きる喜びにつながる

北野財団が生涯教育の観点から調査、研究をしている人々を応援する研究助成金の選考委員長を務める放送大学長の來生新さんにお話を伺いました。

――來生さんが研究者の道を志されたきっかけや研究内容について教えてください。

実家が北海道大学の裏手にあり、キャンパスが遊び場だったこともあり、大学という存在が身近だったことも影響しているかもしれません。当然のように北海道大学に進学し、優雅でチャーミングな英語の先生に憧れたり、30代で法学部学部長を務められていた五十嵐清先生の授業が面白かったりしたこともあって、自然な流れで研究者になることを意識するようになりました。当時は、戦後の高度経済成長から安定成長へと日本経済が激変する中、学会では国家独占資本主義論争が盛り上がっていて、国家と経済の関係性に関心が高まっていました。私自身も、経済活動を国や行政と私企業がどう分担していくのか、また、公共財と私的財の区別で必要性が高まる法制度に関心を持ち、独占禁止法や行政法などの経済法について研究するようになりました。

現在は主に、海洋の総合管理についての研究をしています。漁業、港湾など、海洋に関わる省庁や行政、企業、ＮＰＯは多数あり、責任の所在が曖昧であるという問題があります。東京湾では２０１３年に官民一体で東京湾の豊かな環境を再生することを目的に「東京湾再生官民連携フォーラム」が設立されました。私も発足時から議長として関わり、東京湾の奥深い魅力を再生するための政策提言活動を行っています。毎年秋には東京湾の現状を紹介する「東京湾大感謝祭」というイベントも開催していますので、ぜひご来場ください。

――北野財団について、どのような印象をお持ちですか。

長年、放送大学の選科履修生奨学金と大学院修士全科生奨学金を給付していただき、感謝しています。奨学金を給付する財団は数多くありますが、生涯教育に特化した財団は他にはなく、貴重な存在ですね。人生１００年時代と言われ、いくつになっても学び直しができる現代社会において、生涯学習の比重はこれまで以上に高まっていくことでしょう。

放送大学はまさに、誰にでも学ぶ機会を提供している生涯教育の場です。大学という組織ではありますが、学位取得を目的としない人など、多様な学びのニーズに弾力的に応えられるような展開をしていきたいと考えています。

――余暇はどのように過ごしていらっしゃいますか。

気分転換は料理です。単身赴任をしているので日常的な食事は自分で作りますし、年末年始は1週間にわたって、家族のために台所に立ち続けていました。毎年のお正月に必ず作るのは、中華料理のトンポーローです。今年は、皮付きの豚バラ肉を8kg仕入れて作りました。以前お客さんが多かった時期は15kg作ったこともあります。

――読者の皆さんにメッセージをお願いします。

世界的ベストセラーになった『サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福』（ユヴァル・ノア・ハラリ著）を読了して、なるほどと納得したのは、科学革命前後の違いについて書かれていた内容です。革命前は神がこの世の全てを知っていて、それらを人類がどれだけ知ることができるかという考えだったのに対し、革命後は、この世には分かっていないことが無限にあり、現在の認識も変わる可能性があるという考えになったということです。つまり私たちが認識していることは、たまたま現時点の認識に過ぎないということ。人生の最期まで学び続けることで、認識は塗り替えられ、新しい認識を得ることができ、それが生きる喜びにつながります。年をとっても行動範囲を狭めず、知的好奇心を持って学び続け、人生を楽しみましょう。

人生１００年を生きるかもしれない私たちは、何事も分かったつもりにならず、時代の変化とともに認識が変わり続けることを楽しむことが大切という視点にハッとさせられました。

凄腕シェフ、來生先生のレシピは、副学長を務められていた横浜国大のＷｅｂサイトにも掲載されています。学生への愛情があふれた内容になっています。
http://www.ynu.ac.jp/campus/support/vegetables/recipe.html

手間暇かけた愛情たっぷりの來生先生作のお料理